

上沢遺跡発掘調査報告書

— 第35次調査 —

2000
神戸市教育委員会



▲写真1 上沢遺跡遠景（航空写真・北から撮影）



神戸市長田区上沢7丁目付近から、
兵庫区五番町付近にかけて所在する
上沢遺跡は、その広さ20,000m以上
の遺跡と考えられている。
これまでの調査で、縄文時代から中
世までの、多岐にわたる時代の集落
址が見つかっている。



▲写真2 調査地全景（空中写真・南から撮影）



◀写真3 調査風景

のべ24日にわたる発掘調査には、2名の調査員と多くの作業員が参加した。写真は竪穴住居の床を調査しているところ。

今回の調査は公園建設に伴う事前調査のため、公園の建設予定範囲についての発掘調査となった。調査地の北側（写真上側）には良好な状態の遺構が残されていたが、南側は現代の田を作るために整地されており、遺構はすでに壊されてしまっていた。



▲写真4 古墳時代の遺構面（西から撮影）

写真右奥が竪穴住居、その手

前が土坑（SK10）。

今回の調査では、竪穴住居が

1棟、溝が11ヶ所、土坑が14ヶ

所発見された。

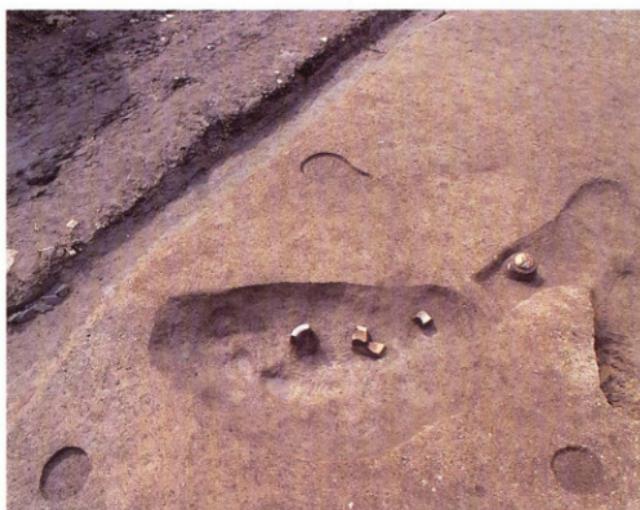


写真5 土坑・SK10（東から撮影）▶

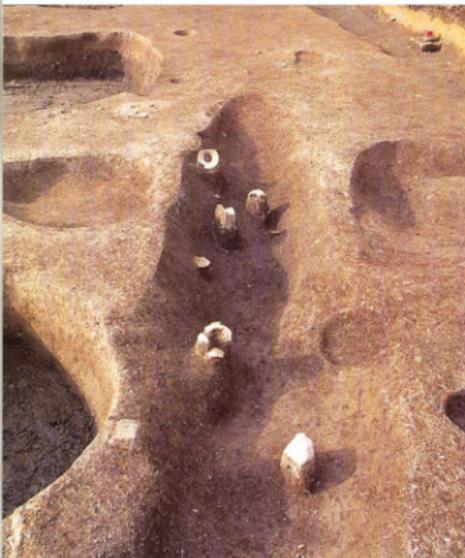
この土坑の底からは、古墳時代の

須恵器や土師器が出土した。



▲写真6 古墳時代中期の竪穴住居（南から撮影）

発見当初、竪穴住居の床の上には、土師器や須恵器の破片、焼け焦げた土や炭の塊が散乱していた。写真是それらの遺物を取り除いた状態。



◀写真7 溝状遺構・SD10（南から撮影）

溝状遺構SK09。
溝の底からは、完形に近い土器がまとめて出土した。

上沢遺跡発掘調査報告書

— 第35次調査 —

2000年

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市兵庫区五番町二丁目に所在する、上沢遺跡第35次発掘調査の報告書である。
2. この調査は、公園建設に伴うもので、神戸市教育委員会と（財）神戸市体育協会が神戸市都市計画局より委託を受けて、平成12年2月1日から、平成12年3月7日にかけて実施したものである。
3. 本書に使用した方位は座標北を示し、水準標は東京湾中等潮位（T.P.）である。
4. 本書に掲載した地図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「神戸」、「須磨」の一帯および、神戸市発行の2千5万分の1地形図「兵庫」の一部である。
5. 本書で使用した遺物写真については、杉本和樹氏に撮影作業を委託して撮影したものである。
6. 調査時の組織は、下表のとおりである。

調査組織表（平成11年度・現地発掘調査）

神戸市教育委員会事務局

教育長	鞍木 崑男
社会教育部長	水田 格二
文化財課長	大勝 俊一
埋蔵文化財係長	渡辺 伸行
文化財課主幹	丸山 潔
主査	菅本 宏明

（財）神戸市体育協会

専務理事	田村 鶴郎
常務理事	中野 洋二
秘書課長	静毅 生一
秘書課長	前田 義晴
主幹	中西 光男
主査	奥田 啓造
調査担当学芸員	月治 康明
	佐伯 二郎
	石島 三和

調査組織表（平成12年度・出土遺物整理作業）

神戸市教育委員会事務局

教育長	木村 良一
社会教育部長	水田 格二
文化財課長	大勝 俊一
社会教育部主幹	渡辺 伸行
埋蔵文化財調査係長	月治 康明
主査	富本 郁男
	丸山 潔
	菅本 宏明

（財）神戸市体育協会

専務理事	鞍木 崑男
常務理事	静毅 生一
秘書課長	前田 義晴
主査	丸山 潔
調査担当学芸員	菅本 啓明
	石島 三和

7. 本書の作成は、文化財課学芸員 石島 三和が担当した。

8. 本書の作成にあたり、三木 雅子氏より多くのご教示を賜りました。厚く感謝し、記して謝礼申し上げます。

NOTES

- This book is the report of the 35th excavation surveys of Kamisawa site located in the Gobancyo 3 Chome Hyogo-ku Kobe city.
- This survey was carried out from February 1, 2000 Through March 7, 2000 by the Kobe city board of Education Secretariat and the Kobe City Sports Association .
- The direction used in for this book shows due north and the height indicates above sea level.
- The map used in this book is a part of 1/2500 of topographical map "Hyogo" issued by Kobe city and 1/50,000 of topographical map "Kobe", "Suma" issued by Geographical Survey Institute.
- The photos of that archaeological remains used in this book, are taken by Mr. SUGIMOTO Kazuki.
- The management panels list is shown below.

The excavation survey organization table of fiscal 1999.

The Kobe city board of Education Secretariat	
Superintendent, Board of educational	KURAMOTO Masao
Director for Social Education	MIZUTA Yuji
Manager for Cultural Assets	OKATSU Toshiichi
Assistant Manager	WATANABE Nobuyuki
Assistant Manager	MARUYAMA Kiyoshi
Assistant Manager	SUGAMOTO Hiroaki

The Kobe City Sports Association	
Executive Director	TAMURA Atsuo
Managing Director	NAKANO Yoji
Managing Director	SEIKAN Keiichi
Manager for General Affairs	MAEDA Toyoharu
Manager for General Affairs	NAKANISHI Mitsu
Manager for General Affairs	OKUDA Norimichi
Assistant Manager	TANJI Yasuko
Field Archaeologist	SAEKI Jiro and ISHIIJIMA Miwa

The organization table for past excavation works of 2000 fiscal year

The Kobe city board of Education Secretariat	
Superintendent, Board of educational	KIMURA Ryoichi
Director for Social Education	MIZUTA Yuji
Manager for Cultural Assets	OKTSU Toshiichi
Manager for Buried Preservation Division	WATANABE Nobuyuki
Assistant Manager	TANJI Yasuko
Assistant Manager	MIYAMOTO Ikuo
Assistant Manager	MARUYAMA Kiyoshi
Assistant Manager	SUGAMOTO Hiroaki

The Kobe City Sports Association	
Vice Chairman	KURAMOTO Masao
Managing director	SEIKAN Keiichi
Manager for General affairs	MAEDA Toyoharu
Assistant Manager	MARUYAMA Kiyoshi
Assistant Manager	SUGAMOTO Hiroaki
Field Archaeologist	ISHIJIMA Miwa

- This book is authored and edited by Miwa Ishijima, field archaeologist of Kobe City Board of Education.

上沢遺跡発掘調査報告書

— 第35次調査 —

目 次

第Ⅰ章 はじめ	1
第1節 調査にいたる経緯	2
第2節 上沢遺跡をとりまく環境	4
第Ⅱ章 遺構	7
第1節 調査地の概要	8
第2節 遺構	10
a. 積穴住居	10
c. 土 坑	14
b. 溝状遺構	12
d. ピット	14
第3節 小結	18
第Ⅲ章 遺物	19
第1節 土器	20
a. 積穴住居出土の土器	20
c. 包含層出土の土器	22
b. その他の遺構出土の土器	22
第2節 製塙土器	24
第3節 鉄器	24
第4節 小結	26
第Ⅳ章 まとめ	27
第1節 概要	28
第2節 遺構	28
第3節 遺物	29
第4節 結語	29
English Translation (英文要旨)	31

図 版

卷頭写真図版（写真1） 上沢遺跡遠景（航空写真・北から撮影）

卷頭写真図版（写真2） 調査地全景（空中写真・南から撮影）

卷頭写真図版（写真3） 調査風景

卷頭写真図版（写真4） 古墳時代の遺構面（西から撮影）

卷頭写真図版（写真5） 土坑・SK10（東から撮影）

卷頭写真図版（写真6） 占墳時代中期の堅穴住居（南から撮影）

卷頭写真図版（写真7） 溝状遺構・SD10（南から撮影）

写真図版（写真8） 調査区東壁土層堆積状況

写真図版（写真9） 調査地全景

写真図版（写真10） 堅穴住居検出状況（南から撮影）

写真図版（写真11） SK10検出状況

写真図版（写真12） SD10検出状況

写真図版（写真13） 堅穴住居出土土器

写真図版（写真14） 遺構出土土器

写真図版（写真15） 堅穴住居出土須恵器・坏身

写真図版（写真16） SK09出土土師器・壺

写真図版（写真17） SD10出土土師器・高坏

写真図版（写真18） 製塙土器

写真図版（写真19） 包含層出土土器

写真図版（写真20） 堅穴住居出土鐵錐

挿図（図1） 上沢遺跡の位置

挿図（図2） 第35次調査区の位置（1/2,500）

挿図（図3） 上沢遺跡周辺の遺跡分布図（1/50,000）

挿図（図4） 調査区東壁上層図

挿図（図5） 調査区平面図

挿図（図6） 堅穴住居 平・断面図

挿図（図7） SK10 平・立面図

挿図（図8） SD10 平・立面図

挿図（図9） 出土土器実測図

挿図（図10） 堅穴住居出土鐵錐実測図

第Ⅰ章 はじめに

Chapter I : Introduction

As a result of the past excavation survey, Kamisawa Site in Hyogo-ku, Kobe-City is thought as the settlement which began in the Jomon Period and continued to the mid medieval Period.

This book is the report of the 35th excavation surveys which was carried out in 1999.

This excavation survey was done before the park construction enterprise that planned by the Kobe-City Housing Bureau.

This survey was limited to the range of construction work. We discovered the surface of structural remains in meters above sea level 8.2m neighborhood by this survey.

第1節 調査にいたる経緯

上沢遺跡について 神戸市の中部、六甲山系の南麓にある上沢遺跡は、神戸市兵庫区上沢通8丁目から、長田区五番町付近までの、約22,000m²の広さにおよぶ遺跡と考えられている。この地で遺跡の存在がはじめて確認されたのは平成元年のことで、比較的最近になって発見された遺跡といえるだろう。

遺跡の発見以降、平成12年現在までの12年間で、すでに36回にのぼる発掘調査が行われ、この遺跡の特性について知るための資料が徐々に集まりつつあるが、これらの調査の結果、上沢遺跡は①縄文時代晚期から弥生時代前期（約2300年前）にかけて、②古墳時代のごく初め頃（約1700年前頃）、③古墳時代の中頃（約1500年前）、④飛鳥時代（約1300年前）、⑤平安時代（約900年前）～中世（約800年前）という、少なくとも5つの異なる時代の集落が、地下に何層にも重なりあっていっているのだということがわかってきてている。

この報告書は、これら多岐にわたる調査のうち、平成11年3月に行われた第35次の発掘調査に関するものである。第35次調査は、上沢遺跡の中でも、最も西よりの場所と考えられている地点で行われた発掘調査である。

調査の概要

この発掘調査は平成11年に、神戸市住宅局による五番町公園建設事業が遺跡の範囲内で計画されたため、工事で地面が削られることによって、地下に眠っている遺跡が破壊されると考えられる部分にある遺跡を、記録保存する目的で行ったものである。

調査は平成11年1月28日より開始され、平成11年3月7日に現地での調査作業を終了するまで、延べ24日間におよんだ。調査の対象となったのは、建設予定地のうち工事の際掘削によって遺跡が損なわれる範囲のみとし、工事を行っても掘削が遺跡の眠っている層まで達しない部分については、調査を行わなかった。

調査の方法

調査は、まず現代のわたしたちが生活している地面である、近代や現代に入ってから盛られた表面の土をバックホウによって取り除いた後、人力で古い時代の人間が生活していたと考えられる当時の地面の深さまで掘り下げるという方法でおこなった。現在の地面から、工事によって掘り下げられる深さは約100cmで、掘り下げた地点の標高は8.2m付近となる。この間の堆積層中で確認できた造構面（古い時代の人間が生活していた当時の地面と考えられる地層）は、1面だけである。あるいは、標高8.2m地点よりも深いところに、もっと古い時代の遺跡が眠っている可能性も考えられるが、今回の調査ではそのような層の存在は確認できなかった。ただし、調査地の近隣のすでに調査が終了している地区で得られたデータなどから、標高8.2mより深い部分に遺跡が存在しているのかどうかについて、ある程度の予測を立てることは可能と思われる。



図1 上沢遺跡の位置



図2 第35次調査区の位置 (1/2,500)

第2節 上沢遺跡をとりまく環境

上沢遺跡のある神戸市兵庫区周辺は、古くは旧石器時代よりその歴史をとどめ今にいたる、あまたの人間活動の痕跡が残される地である。それはまた言い換えると、古くから都市の発達してきた地域であるともいえるが、このような都市部では、最近まで大規模な遺跡の発掘調査が行われることはまれであり、その地下に眠る歴史を知る機会は多くはなかった。しかし、不幸にも平成7年におこった阪神大震災後の復興事業の急増は、都市部でも事前の発掘調査の急増と結びつき、次々とこれらの地域での遺跡の実態が明らかにされ始めている。今回報告する第35次調査の結果について見る前に、その周辺の遺跡を概観し、上沢遺跡がどのような歴史的環境のなかで発達したかを知ることとしよう。

旧石器時代

上沢遺跡のすぐ北側には、旧石器時代のナイフ形石器が採集されたことで知られる、会下山遺跡がある。しかしこの地で旧石器人たちがどんな風に暮らしていたかは、今まで詳しく述べてない。

縄文時代早期～後期

縄文時代のはじめには、宇治川南遺跡や雲井遺跡が早期の土器を出土する遺跡として知られている。神戸市内でどのように縄文時代が始まったかは、まだまだ謎が多いところだが、縄文時代も晚期に入ると、急速に遺跡の発見例が増える。

縄文時代晩期

上沢遺跡も、縄文時代晩期の突帯文土器を出土する遺跡として知られているが、これまでの調査で住居址などの具体的な人間の生活痕が発見された例はなく、実態は謎に包まれたままである。上沢遺跡の周辺で、同じように縄文時代晩期の突帯文土器を出土する遺跡としては、大手町遺跡や長田神社境内遺跡、五番町遺跡、三番町遺跡、戎町遺跡などが知られている。

弥生時代前期

この地域では、縄文時代晩期の土器が弥生時代前期の土器と一緒に出土することが多く、弥生時代の始まりについて考えるための問題を投げかけているが、上沢遺跡もその例外ではない。その他同じ兵庫区の大開遺跡は、弥生時代前期の環濠集落として名高いが、ここでは神戸市内でも珍しい弥生時代前期初頭の土器と、縄文時代晩期の土器が一緒に出土していて、この地で最も古い弥生時代集落がどのように始まったかを教えてくれている。

弥生時代中期

弥生時代中期の遺跡としては楠・荒田町遺跡が有名だが、他にも戎町遺跡や大田町遺跡、大手町遺跡などでこれまでに発掘調査が行われ、この時期の集落遺跡と考えられている。千歳遺跡では、この時期の壇棺などが発見されており、集落の存在が予感されるが、調査例が少なく、実態はいまだ不明である。布引丸山遺跡、熊野遺跡なども、その実態はよくわからていないが、中期の遺物の採集地として記録が残っている。

弥生時代後期

弥生時代後期のものとしては、長田神社境内遺跡、神楽遺跡、戎町遺跡、松野遺跡、大手町遺跡、などが集落遺跡と考えられている。

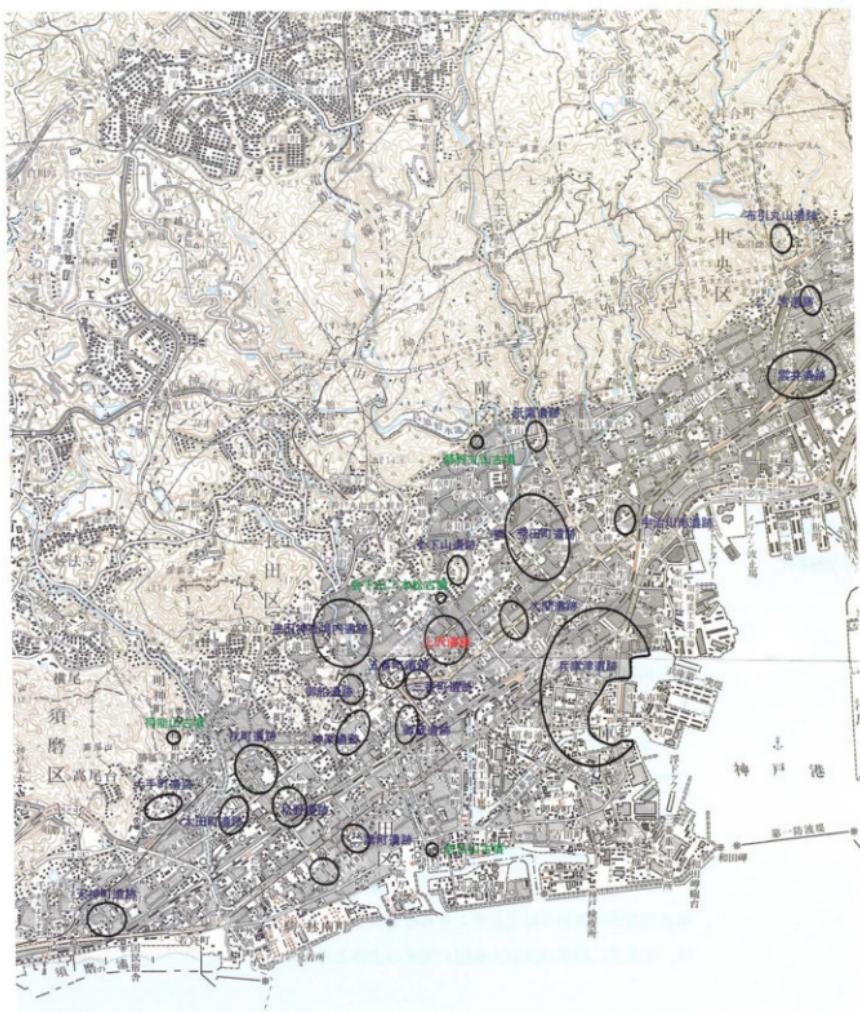


図3 上沢遺跡周辺の遺跡分布図（1/50,000）

古墳時代前期

古墳時代の遺跡としては、上沢遺跡の近隣には、得能山古墳、会下山二本松古墳、夢野丸山古墳の3つの古墳が、古墳時代前期のものとして知られている。この時期の遺跡はこれまであまりみつかっていなかったが、最近長田区御藏遺跡では、前期の集落、水田跡などが発見されている。同じく長田区の御船遺跡もほぼ同時期の集落と考えられる。

古墳時代中期

今回調査した上沢遺跡第35次調査区では、古墳時代中期の堅穴住居が発されており、当遺跡に中期の集落が存在する可能性を示しているが、その他松野遺跡、神楽遺跡、三番町遺跡なども、同じ時期の集落と考えられている。このころ造られた古墳としては、念佛山古墳があげられる。

古墳時代後期

古墳時代の後期にもいくつかの古墳が存在していたと考えられているが、実態はよくわかつていない。上沢遺跡、御藏遺跡にはこの時代の集落があると考えられている。特に、上沢遺跡では、包含層中から多量の玉類が出土するなど、玉造の遺跡の可能性が高まっているが、今のところそれを裏付ける直接的な遺構などは見つかっていない。

奈良時代～

平安時代

古代のものとしては、御藏遺跡で平安時代時代の木棺墓群が発見されるなど、最近注目を集めた遺跡である。長田野田遺跡もこの時期のものと考えられている。

御藏遺跡は、奈良時代から平安時代まで続いた集落らしく、この時代の掘立柱建物群が発見されている。上沢遺跡でも平安時代の掘立柱建物は多く見つかっているが、その他正倉院御物と近似する銅碗などが出土した井戸なども最近発見され、付近に寺院などが存在する可能性が高まっている。

中世のものとしては、長田区二葉町遺跡では、掘立柱建物や井戸などが数多く見つかっており、当時の庶民の生活をほうふつとさせてくれる。ほぼ同じ時期に、御船遺跡でも建物や井戸などが発見されており、近年のこの地域での資料の増加はめざましいものがある。その他大田町遺跡、大手町遺跡でもこの時期の遺構が見つかっている。

また、兵庫区付近は、源平にゆかりの深い土地としても有名だが、最近祇園遺跡では、福原京関連の貴族の邸宅と考えられる遺構などが見つかり、注目をあつめた。兵庫津遺跡は、平清盛に関係の深い大輪田泊関連の遺跡と考えられている。

第Ⅱ章 遺構

Chapter II : Features

It become clear that the surface of structural remains was confirmed at the point 8.3m height above sea level by the survey this time. The containment layer had accumulated on just above the surface of structural remains.

There was no structural remains under the point 8.3m height above sea level.

A pit house, ditches, earthen pits and some pits were discovered on the surface of structural remains.

第1節 調査の概要

今回の発掘調査で、現代の地表面から標高8.2m地点まで掘り下げる間には、何層かの時代の異なる層が、古いものほど下になりながら時代順に重なっていたが、それらの堆積層のなかで昔の人間が生活していた痕跡をとどめている考古学的堆積層として確認できたのは、1層だけである。

今回の調査地点に現代のわたしたちが立った時目にする光景は、所狭しと立ち並ぶ家々である。上沢遺跡のある神戸市長田区から兵庫区のあたりは、神戸市のなかでも「旧市街」とよばれ、古くから人口が密集する都会である。自然発生的に発達した町並みの地域で、裏路地のたくさんある昔ながらの情感を漂わせた地域である。これら旧市街は、六甲山系の山々を北に背負うようにして発達しており、街全体が北から南へ、山の麓から海に向かって下る緩やかな斜面地形上にたっている。そしてその街の地下に眠っている遺跡もまた、同じように北から南へ下がっている地形の上にのっているわけである。上沢遺跡はそのような環境に立地している。

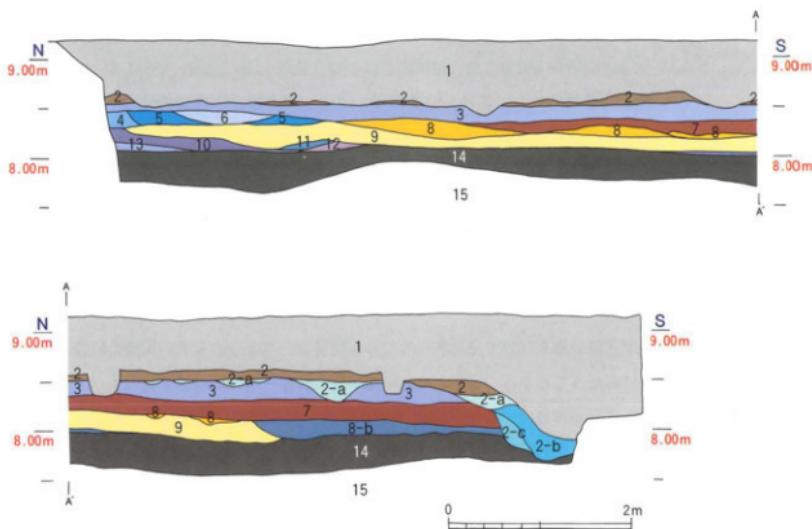
調査地内の 基本層序

先に書いたように、今回の発掘調査で現代の地表面から標高8.2m地点まで掘り下げる間には、何層かの時代の異なる層が、古いものほど下になりながら時代順に重なっていたが、それらの堆積層の基本的な順序は下記の様である。

現在の地面には、地震で倒壊した建物のコンクリート基礎が露呈していたが、それを取り除くと最近まで耕作が行われていたらしく、現代の田圃の層が現れる。この田圃は、南側が北側より1段低くなるように、もとの地面を深く削ってつくっているため、調査範囲の南半分については、地面が標高8.2mよりさらに下まで削り取られてなくなってしまっていた。北半分については、この田圃の層をさらに、標高8.5m付近まで掘り下げるにより古い層が現れる。この層は暗褐色の粘土層で、古墳時代の土器が多く混じっている。このような、古い時代の遺物を多く出土する層を遺物包含層という。この層のさらに下層を目指して標高8.3m地点まで掘り下げると、褐灰色のシルト質粘土層が現れるが、今回この堆積層の上で、古代の人間の生活の痕跡を確認した。

遺構面以下層

この層よりも下の層については、先にも述べたように公園の設計上の理由から発掘調査は行われなかった。ただし、一ヶ所に幅1m長さ14mのサブトレーナーをもうけて、さらに下層に遺跡が存在するかどうかをたしかめた。このサブトレーナー調査では、標高8.3m地点よりも下には、標高7.1mまでずっと、淡黄灰色～黄色～灰色の、砂層の堆積が確認された。これらの堆積物はその堆積の状態から見て、洪水などの流水に押し流されて堆積した土と考えられるが、それらの層からは土器などが出土しなかったため、堆積した時期はよくわからない。したがって上記の遺構面より下層には、標高7.1m前後の深さまではさらに古い時代の遺跡は存在しないと判断して調査を終了した。



1. 現代盛土 2. 暗灰色砂質土 2-a. 灰色砂質土 2-b. 暗灰色シルト 2-c. 暗灰色砂質シルト
 3. 淡灰色砂質土 4. 暗灰色粘質細砂 5. 暗灰褐色砂礫 6. 暗褐色粘土 7. 淡灰褐色砂
 8. 暗灰褐色砂 8-a. 淡褐色砂礫 9. 灰褐色砂 10. 灰色シルト質細砂 11. 灰色細砂
 12. 綠灰色シルト 13. 灰色粗砂 14. 黒色シルト 15. 黑灰色砂礫

(1～6層、8-a層は、旧耕作土など現代の堆積層。7層は古墳時代中期の遺物包含層。8-b層は遺構埋土。
 9層が古墳時代中期の遺構面となる。)

図4 調査区東壁土層図



写真8 調査区東壁土層堆積状況

点線で示した層が、古墳時代中期（5世紀末）の遺構面。

第2節 発見された遺構

今回の調査で発見された遺構面には、竪穴住居、溝、土坑、ピットなど、さまざまな遺構が残されていた。これらの遺構は、出土した遺物から古墳時代中期（1500年前頃）の人々が残したものではないかと考えられる。

確認された遺構の総数は、竪穴住居が1棟、溝11ヶ所、土坑が14ヶ所、ピット21ヶ所である。

a. 竪穴住居

竪穴住居の規模

調査地の南東部分で発見されたこの住居跡は、ちょうど現代の田圃の段差が造られた部分にあたってしまっているため、南側が削られて一部欠けた形で見つかっている。残っている部分から見て、一辺が4.6m以上の、床の形が四角い住居跡と考えられるが、正方形のか長方形なのかは、南側が削られてなくなっているため不明である。

発見当初、住居跡のへこみの中には古墳時代中期の土器が多く混じった土が堆積していたが、この土を取り除くと、約1500年前にここに人が住んでいた当時の床面が確認された。この床面には、須恵器や土師器の破片とともに、焼け焦げて赤く変質した土や、炭の塊が2ヶ所で確認されている。これらの遺物はこの住居で生活していた人が残したものと考えられる。また、遺物以外にも床面からは、4ヶ所の柱穴と機能の不明なピット（小さな穴）2ヶ所が見つかっており、この竪穴住居は、少なくとも4本以上の柱で屋根を支えていた構造であることがわかる。これらの柱穴は、大きいものでは1m以上の掘形をもっている。床に残された4つの柱穴は、大きさはそれぞれ異なっているがどれも丸い形の穴である。柱穴に詰まっていた土の堆積の状態を観察した結果、これらの柱穴に、それぞれ直径が20～40cm前後の柱が据えられていた痕跡が残されていた。4つの柱穴からは、土器の破片が少量ずつ出土しているが、小さなもののばかりである。その他、調査によってこの住居の床は、地面を10cm程度掘りくぼめたあと、あらためて他から運んできた土で床をはって造ったものであることもわかった。

床面の状況

住居跡のくぼみに堆積していた土を取り除いたときわれわれが目にしたのは、土器のかけらや黒焦げになった炭の散らばった床だった。その床の上を丹念に調査していくと、4つの柱穴と、2つの小さめの穴が確認された。このため、ここが1500年前の住人が歩いた床の上だと考えられたが、よく観察するとこの貼床の中にも土器の破片が混ざっているのがわかつたため、この土がどこから運ばれてきたものだと考えられた。そこでわれわれは床の上の調査を一通りすませたあと、貼床をはがす作業にはいったが、この作業中に出土した土器は、床の上にはり付いていたものと時期的には差はないことが明らかになった。



図5 調査区平面図



写真9 調査地全景

貼床	床材の土は5cm程度の厚さで貼られており、これを取り除いたところもとの地面があらわれた。この地面は、半らなものではなく起伏のあるそこほどの状態で確認されている。
	以上のような調査結果から、この竪穴住居は、まずある程度粗く地面を掘り込んだ後、床用の土をはって平らに整え、さらにそのあとで柱穴を穿ち、柱を立てて、屋根を架けるという手順で建てられたものと推測される。
竪穴住居の時期	この住居は、床に捨てられていた土器片から見て、5世紀後半のいくつかの時期に建てられて、やがて人が住まなくなつて廃屋になったものと考えられるが、建てられてから、廃屋になり屋根がつぶれて住居の中に土が堆積するまでの間に、それほどの時間差がないことは、貼床に混じっていた土器（建ててる時の物）、床の上に散らばっていた土器（人が住んでいた時の物）と、住居を埋めている土から出土する土器（廃屋になって以降の物）、さらにその上、遺跡全体に堆積していた包含層から出土した土器がどれも同じような時期のものであることから推測されるものである。
b. 溝状遺構	
SD01～04	この調査では、溝も多く発見されている。溝は、調査地内のあちこちで見つかっているが、はっきりと溝とわかるものが8ヶ所、溝の可能性が高いが、調査地の外に伸びていったりして、はっきりした全体の形のわからないものが3ヶ所の、計11ヶ所が確認されている。
SD01～04	確認された溝のうち、調査地の西側で確認された4ヶ所の溝（SD01、02、03、04）については、どれも南北方向に走り、幅20cm程度で、深さは約5～10cmとよく似た形をしている。これらは比較的まっすぐに互いに平行に走って、調査範囲の外へ続いている。溝の全容や、何に使われていたものかなどは不明で、中から出土した土器もごく小さな破片ばかりである。形から見て、もっと上層の耕作痕である可能性が高い。
SD05～09	一方、調査地の東半で確認された4条（SD06、07、10、11）については、幅、深さ、溝の向きはそれぞれまったく異なる。また、調査地の東半では、はっきりした形のわからない溝状の遺構が3ヶ所（SD05、08、09）見つかっているが、そのうちSD05と名付けられたものについては、SD06と、SD08についてはSD07と、それぞれ木米は一本の溝がとぎれて2ヶ所で確認されたものである可能性も考えられる。
SD06	これらのうち、SD06は、調査地のほぼ中央付近で見つかったもので、東西方向に延び、やや南に円弧を描くような平面形をしている。溝の幅は40cm程度だが、深さは約3cmと非常に浅い。出土した遺物もごく小さなものである。溝の長さは約8mである。

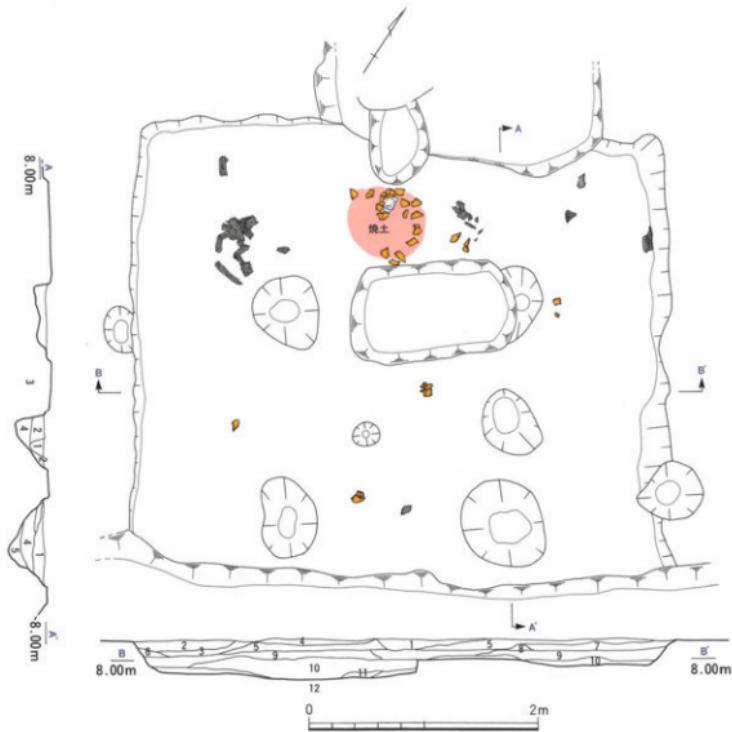


図6 積穴住居 平・断面図



写真10 積穴住居検出状況（南から撮影）

床の上には4つの柱穴が残っていた。
写真は、床の上にあった遺物を取り除いた状態。

- SD07** SD07は、SD06と交差するようにして見つかっている、南北方向に走る溝である。幅約30cm、深さは5~10cm程度である。SD06がSD07の上から造られていることから、SD07はSD06より古い時期のものとわかるが、出土遺物はどちらも小片で、正確な時期差は不明である。溝の長さは約3mである。
- SD10** SD10は、SD07より東側で見つかったものである。やや西に軸のふれた南北方向に走り、幅70cm、深さは15~20cm、長さは4m程度である。この溝は、上述のものと違い深くはっきりした平面形で、遺物も良好な状態のものがまとまって出土しているが、何のために造られたものかは不明である。
- SD11** SD11は、調査区の北東角部分で見つかった溝である。調査区の外まで延びていているため、全容は不明である。見つかっている範囲では幅80cm以上、長さは3.4m以上、深さは10cm程度である。何のために造られたものは、よくわからない。

c. 土坑

調査区内には、土坑も多く発見されている。見つかった土坑は全部で14ヶ所である。そのうち特に、SK10と番号をつけたものは、大きく、中からまとまった土器が出土している。

- SK10** 調査区の東南部分で見つかったこの遺構は、長径約2m、短径約1.3m、深さ約30cmの楕円形で、断面でみるとすり鉢状の穴である。この土坑の中からは、古墳時代中期の土器片が多く出土している。しかし形からは、何に使われていたものは判断できない。

d. ピット

これらの遺構の他に、調査区内のあちこちで直径20~30cm前後の穴（ピット）を多く確認している。全部で21ヶ所確認された、これらのピットは何に使われたものか、機能などがわかるものではなく、それらの互いの位置関係はどれも不規則な場所にあり、掘立柱建物などの住居の柱穴である可能性も考えにくい。

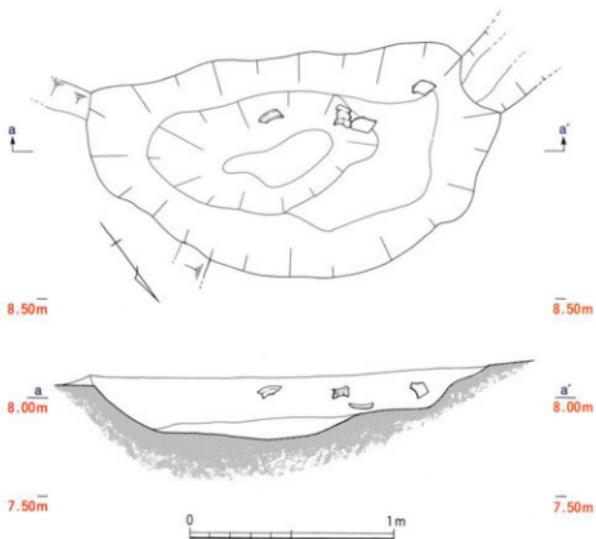


図7 SK10 平・立面図



写真11 SK10検出状況



写真12 SD10検出状況

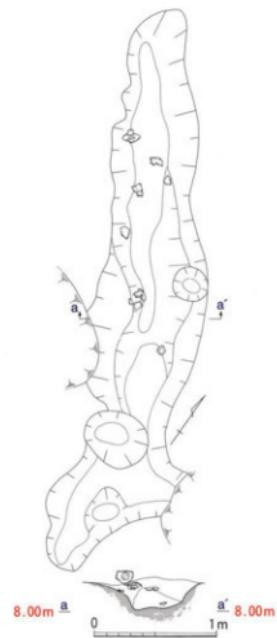


図8 SD10 平・立面図

第3節 小結

以上が、今回の発掘調査で確認された遺構の全容である。これらの遺構からはそれぞれ土器が出土している。これらの破片は小さすぎて時期を判定することができないものも少なくないが、ある程度まとまった形や大きさのものもある。出土遺物については、次の章で詳しく述べるが、結論だけ先に紹介すると、どれも古墳時代中期に使われた土器の破片であると思われる。このことは、これらの遺構が古墳時代中期のものであることを示している。

今回の調査で発見された遺構のうち、特に竪穴住居が注目される。上沢遺跡では、これまでに行われた数々の調査でも多くの住居跡が見つかっているが、そのほとんどは奈良時代～平安時代のものである。古墳時代初頭のもの、弥生時代前期のものなども見つかっているが、今回のような古墳時代中期のものはそれらに比べて発見例が少ない。

上沢遺跡そのものは、縄文時代晚期～弥生時代前期、庄内式期（古墳時代初頭）、古墳時代中期、古墳時代後期、奈良時代～平安時代、中世と、さまざまな時代の遺跡が何層にも重なって地下に眠っている複合遺跡であることが、これまでの調査で判明しているが、それぞれの時期ごとに分かれて遺構の密に存在している地区があると考えられる。

過去の調査結果からみて、上沢遺跡全体のうち、東側の地域には奈良時代～平安時代と弥生時代前期の遺構が多く見つかっており、逆に西側には古墳時代の遺物の出土を多くみている。このことから、上沢遺跡の範囲として現在考えられている広がりの中でも、古墳時代の集落はおそらく遺跡の中の西よりの地域に存在するものと考えられるが、今回の調査の結果、これまであまりよくわかつていなかった古墳時代中期の集落の一部を確認したものと考えてよいだろう。

第Ⅲ章 出土遺物

Chapter III : Artifacts

Two-thirds of the pottery excavated by the survey in this time was excavated from the structural remains. The remainder is the one that was excavated from the layer containing cultural remains.

These potteries were the things of the Middle of Kofun Period. An iron arrow head and salt-making pots were excavated other than the pottery.

第1節 土器

今回の調査では、28ℓ容量のコンテナに約3箱分の遺物が出土した。そのほとんどすべてが土器だが、1点だけ鉄製品が出土している。

3箱分の土器のすべてが、本来の形をとどめない破片で、その3分の1は造構面のすぐ上に堆積していた遺物包含層から、3分の2は造構の中に堆積していた土から出土したものである。これらの中から、特に時代を決定することができるような特徴的な部位、あるいは特殊な器種などを選び出して、ここに記載する。

a. 穫穴住居出土の土器

竪穴住居から出土した土器は、住居址内に堆積していた土に混じっていたもの、住居の床の上に散乱していたもの、住居の床材として使っている土の中に混じっていたものの3つに分けられる。前章で書いたように、床の上に散乱した状態で出土した土器は、竪穴住居の住人が捨て去ったもの、千年以上の昔そのままに原状に近い状態を保っていると考えられる。一方、竪穴住居内に堆積していた土に混じっていたものは、住居が廃屋になり倒壊したあとに流れ込んできた、風化の段階での堆積物である。このように考えるなら、両者の間には、一定の時間差が存在するはずだ。

須恵器

須恵器については、残りがよく、器種や形がある程度わかるものは3点あった。どれも床面に散乱していたものである。

坏

そのうちの図9の2は、須恵器の坏である。体部のやや下がった位置からへら削りをほどこし、丸みを帯びた器形で、口縁の立ち上がりは長く、端部は面をなさず尖っている。

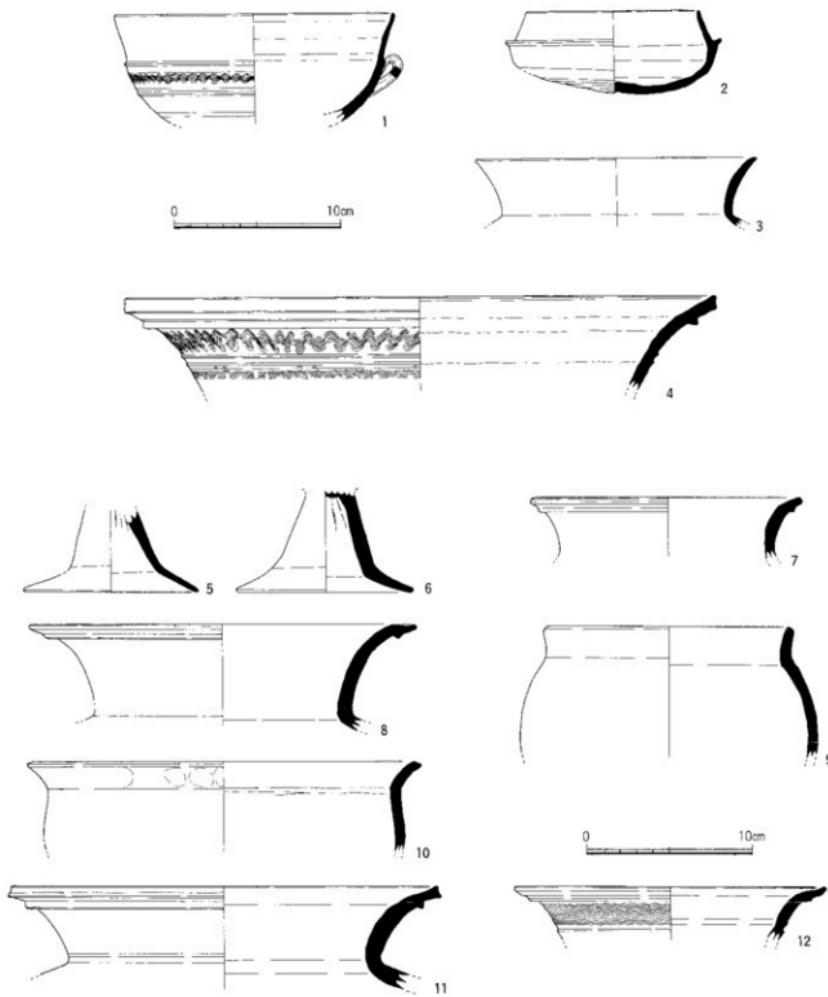
高坏

1は、高坏の坏部分である。脚部分は欠けてなくなっている。2条の突帯の間に、波状文の文様帶で装飾を施し、文様帶の上に把手が付いている。初期須恵器の典型的な特徴をもつ。それぞれの口径を復元すると、1は17.2cm、2は10.5cmとなる。

4は、壺の口縁から頸部にかけての破片で、復元された口径は35.9cmである。右図に見るように、突帯と波状文で装飾を施し、外反する形の口縁で、その端部は鋭い。

甕

住居の床の上に散乱していた土器は、どれも比較的の残りがよく、実測して図化することができたが、住居跡内に後から堆積した土や、床材の土に混じっていた土器はどれも小さな破片ばかりで、図化できるほど残りのよいものは1点しかなく、ほかは肉眼で観察する作業にとどまった。肉眼での観察作業の限りでは、住居跡内に後からたまたま土から出土した土器や、床材の土に混じっていた土器と住居の床の上に散乱していた土器とは、ほぼ同じ時期のものと考えられる。



1～4. 整穴件居床面一括出土土器 1, 2, 4は須底器 3は上師器
 5～8. SD10出土土器 5, 6は上師器。7, 8は須底器
 9. SK10出土土器 10. SK15出土土器 11, 12. 包含層出土須底器

図9 出土土器実測図

土師器

堅穴住居からは、須恵器のほかに、土師器も出土している。どれも小さな破片で、劣化の度合いも著しいが、高坏の脚部、壺の口縁部など、器種が判別できるものもあった。

壺

土師器のうち、図9の3は壺の口縁である。復元した口径は17.2cmとなる。摩滅が著しく細かな調整は不明だが、口縁は短く外反する形で、端部は丸い。

b. その他の遺構出土の土器

堅穴住居以外にも、比較的残りのよい土器が出土した遺構が何ヶ所かある。特に、SD10とSK10と番号を付けた遺構からは、まとまった量の土器が出土している。

遺構出土 の土器

遺構から出土した土器のうち、残りがよく図化など詳細な観察作業に耐えうるものは5点あったが、その内訳は、須恵器が2点、土師器が3点となる。すべて破片で、器種ごとに分けると須恵器はどちらも壺の口縁の破片、土師器は高坏の脚が2点、壺の口縁の破片が1点である。

須恵器・壺

図9の8はSK10から出土した須恵器の壺の口縁である。口径を復元すると23.5cmとなる。外反する口縁で、端部や下の位置に断面三角形の突帯で飾っているタイプのものである。

土師器・高坏

5と6は、土師器で、高坏の脚部分である。どちらも短い脚で、裾が大きく開くタイプのものである。

土師器・鉢

10は、SK15から出土した土師器の鉢の、口縁部分の破片である。短い端部が外反するタイプで、体部はやや内側へ傾く。復元した口径は24.0cmである。

土師器・壺

9もSK10から出土したもので、土師器の壺の口縁部分の破片である。著しく摩滅しているため、細かい点は不明だが、口縁は短く、直立するタイプの短頸壺である。復元すると口径は15.2cmとなる。

須恵器・壺

7はSK10から出土したもので、須恵器の壺の口縁の破片である。復元した口径は16.6cmである。

c. 包含層出土の土器

その他、遺構面のすぐ上に堆積していた遺物包含層からも、遺構から出土したものと同じ時期の土器の破片が出土している。

須恵器・壺

図9の12は、包含層から出土したもので、須恵器の壺の口縁部分の破片と思われる。復元した口径は19.0cmで、断面が三角形の突帯と波状文で装飾されている。

11は、同じく包含層から出土したもので、壺の口縁部分の破片である。断面が三角形の突帯で装飾されており、復元した口径は26.3cmである。

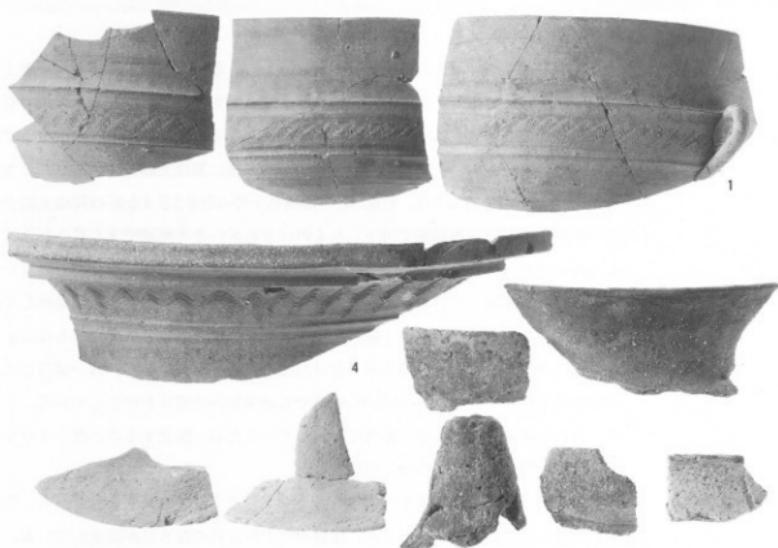


写真13 壁穴住居出土土器

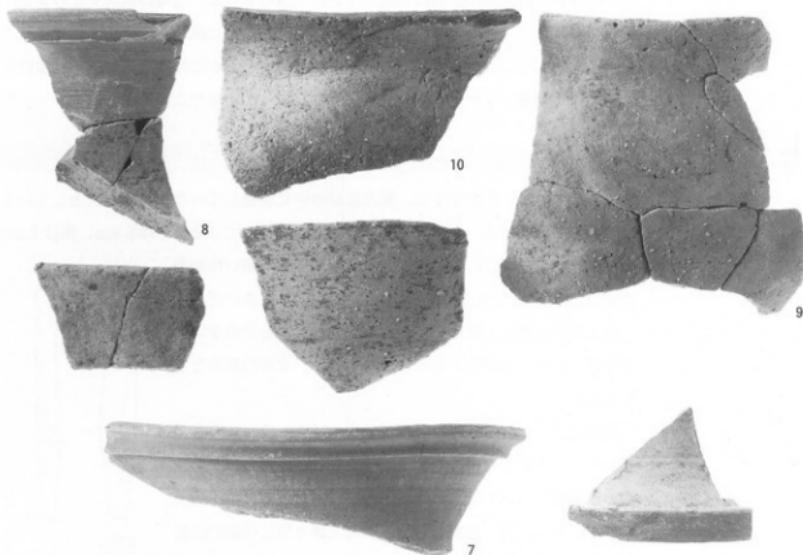


写真14 深溝出土土器

第2節 製塩土器

今回の発掘調査ではこれら日常雑器類とともに、多くの製塩土器の破片も出土している。製塩土器とは、海水から塩をとるために使う道具である。濃縮した海水を炉で蒸発させ、塩の結晶を取り出すという方法を当時の人々は塩を手に入れるためにおこなっていたと考えられているが、この、炉で海水を結晶させる工程に製塩土器が用いられたとされている。各地の海岸部の遺跡からは、土地ごとの地域色を持ったさまざまな形の製塩土器が見つかっているが、今回の発掘調査で出土したものはどれも、この地域でよく見られる「コロン」とした、グラスの下を膨らませたような形で、厚さは1mmにも満たないものばかりである。これは極端に摩滅していることもあるが、結果的に後の時代の私たちが発掘して土の中から取り上げたときには、細かく割れてしまって元の形をとどめていないものばかりとなる。

今回の調査では、これらの混ざり合った細かな破片を観察して、同一個体と思われるものにわけて作業を行った。その結果、最低でも46個体分の破片が出土していることがわかった。どれも極端に摩滅して、割れてしまっているため、図化することはできなかったが、口縁部分が残っているものは6個体あった。

出土場所ごとに分けてみると、最も多く出土したのは竪穴住居からである。竪穴住居の中に堆積していた土の中から5点、床材の土から3点の計8点が出土している。

住居址以外にも、土坑、溝などからも多く出土している。しかしこれらの製塩土器のうち、先に書いた住居の床面に散乱していた土器のような、当時の状況をそのままとどめているものではなく、どれも遺構の中に後から堆積した土に混じっていたものである。製塩土器は多く出土したが、製塩炉などの遺構はなく、どこかこの調査地の近くで塩作りをしていたことは間違いないが、直接的な証拠は見出せなかつたことになる。

第3節 鉄製品

土器以外には、鉄錐が1点、竪穴住居の中に堆積していた土中から出土している。先端が欠損しているため、全体の長さは不明だが、残っている長さは4.9cm、幅は7mmである。厚さは4mmで、断面は方形である。錐身の平面形は細い柳葉形だが、わずかにくびれがあり、茎と錐身の境とみてよいだろう。

出土時の状態は、激しくさびが浮いて原形をとどめないほどであったが、さびをとりのぞいたところ、本来の形をとりもどした。

鉄製品など、土器に比べてはタイムマーカー的な性格に乏しいため、そのものから直接時期を知ることは難しいが、今回の出土品については、竪穴住居内の堆積土からの出土品であることから、同一遺構から出土した土器と同じ時期の鉄製品である可能性が高い。

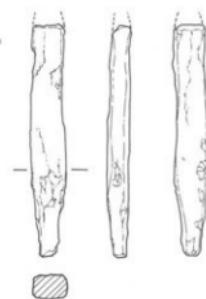


図10 竪穴住居出土鉄錐実測図



写真15 穩穴住居出土須恵器・坏身

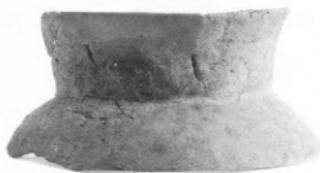


写真16 SK09出土土師器・壺



写真17 SD10出土土師器・高壺



写真18 製塙土器



a.



b.

写真20 穗穴住居出土鐵鎌



写真19 包含層出土土器

第4節 小結

竪穴住居出土 土器の年代

今回の出土品の中で最も多くのことを教えてくれるのは、竪穴住居の床の上に散乱した状態で発見された土器であろう。

通常土器の示す年代によってわれわれはその遺構の時期を判断するが、竪穴住居の床上の土器は、5世紀末ごろを示している。

やや専門的な話になってしまふが、図9の1の高坏は、田辯昭三氏によるところの、TK208と呼ばれる型式からそれに続くTK23と呼ばれる型式にあてはまると考えられ、その実年代は5世紀の100年間を、前半と後半の50年づつに区切って考えた場合、後半の範囲に収まっているといわれている。

土器の時代差

ところがその高坏と一緒に出土している2の坏については、上に述べた二つの型式よりある程度あたらしい時期の特徴を備えている。この坏のような先の尖った口縁端部や器形を整えるためのへら削りを施す場所は、6世紀ごろのより新しい時期のものに多い特徴だが、一方で、丸みをおびた器形、長い立ち上がりなどは5世紀末の時期の特徴である。このような特徴をどう解釈すべきかは、須恵器研究者の間でも意見の分かれるところであろうが、現時点では二つの土器は同じ5世紀の後半で、坏は高坏よりは新しい時代のものだが、6世紀までは下らないと考えるのが妥当であろう。

これらの土器は、おそらく竪穴住居の住人（あるいはそれに近いところにいる人物）の手で、家の中に置き去りにされたものであると考えている。つまりこの高坏と坏は共存していた、同じ時に同じようにこの家の住人に使われていたと考えられる。ふたつの土器の間には、一定の時間差が存在するが（おそらく20ないし30年程度）、器はある程度長い時間を経ても使われつづけることがあるという点も考慮に入れて、この竪穴住居に土器が置き去りにされ、住人たちがどこかへ立ち去ったのは、5世紀末と考えたい。おのおの土器はいくつかの破片に分かれているものの、それぞれ一塊ずつ床の上で見つかっているところから見て、置き去りにされた時点では完全に近い形であったろう。建物のなかに土が堆積していく過程で押しつぶされていったのではないかと考えられるが、今回は、床上に密着しているものだけを原状を保った遺物として扱ったため、同じ土器の破片の一部（上を向いていた部位）や、少しでも床から浮き上がったものは住居を埋めている堆積層内の遺物として区別されてしまった。同じ個体のものは見ればわかるが、実際には住居内に堆積した土からの出土品には、原状を保っていた遺物と二次的堆積の遺物が混在している可能性が高い。そのことは、床上の遺物と、竪穴住居を埋めていた土から出土した遺物との間に時間差が感じられない結果を生む一因になったと思われる。

土師器については、良好な資料が少ないため、時期の判定に苦慮するが、器形の特徴からみて、やはり5世紀末のものである可能性が高い。

土坑、溝、包含層などから出土した土器のうち、図9の11の須恵器などは、竪穴住居のものより古相の印象をもつが、やはり5世紀後半の範囲におさまると考えている。

以上の点から、今回の調査地で出土した土器は新しいもので5世紀末、古いものでも20ないし30年程度それをさかのばる時期のもの、すべてが5世紀後半の50年間のどこかにおさまるものと考えられる。

第IV章 結語

Chapter IV : Conclusions

Judging from the excavation remains, it is thought that the pit house became a dilapidated house at the end of the 5th century. Other structural remains were the same time. There are too few data draw the whole picture of the Kamisawa site in the Kofun Period.

The future subject may be to integrate all of the excavation results and restore the past of the community of the Kamisawa Site.

第1節 調査にいたる経緯

以上、本調査の結果について、遺構および遺物をそれぞれ詳述した。ここで今一度これまでの記述についてまとめておこう。

今回の調査は、神戸市住宅局による公園建設に先立つ発掘調査である。本発掘調査は公園建設予定地内の、工事によって遺跡が破壊される範囲、約370m²に限定しておこなったものである。また、工事によって地表面から地下へ標高約8.2mの地点まで掘り下げられるが、それより深いところについては工事影響範囲の外となるために、遺跡の存在の有無にかかわらず、発掘調査の対象外とした。

発掘調査の結果、調査対象範囲のうち、北側約190m²について、標高8.3m地点で古墳時代中期（5世紀末）の遺構面を確認した。範囲内の南側約180m²に関しては、現代にはいってから耕作地となっており、標高8.2mよりもさらに深いところまで削られてしまっていて、遺構面はすでに失われていた。

遺構面上で発見された遺構は、竪穴住居1棟、土坑14ヶ所、溝状遺構11ヶ所である。これらの遺構のうち、溝状遺構については、新しい時代のものも混じっている可能性があるが、出土遺物からみてほとんどのものは古墳時代中期（5世紀末）のものと考えられる。

第2節 遺構

竪穴住居

発見された遺構の中で最も注目されるのが、竪穴住居である。この住居の床の形は四角形だが、南側が現代に削られてなくなってしまっているため、その全体像は不明である。現在確認できる範囲では、床の広さは東西に4.6m、南北に4.6m以上あったと考えられる。床面には、屋根を支えていた柱の穴が4箇所見つかっており、それ以外にも、用途のよくわからないピットが2箇所見つかっている。

また、床の上には土器のかけらが散乱していた。これはこの家の住人が、家を捨てて立ち去るときに残していくものと考えられる。これらの土器を詳しく調べた結果、住居が捨てられたのは5世紀末の出来事であったとわかった。この竪穴住居は、建築の工程としては、地面を粗く掘りくぼめた後、土を運んできて床をはって、その後柱用の穴を掘り、柱を立てて屋根を架けたものと考えられる。4つの柱穴の掘形はどれも1m以上もある大きなものだが、この穴に堆積していた土の堆積の様子を観察した結果、柱の太さは20ないし40cm程度のものだったと思われる。

その他の遺構

また、調査地内では竪穴住居以外に、機能の良くわからない溝や土坑なども多く見つかっているが、これらの遺構からも同じ時期の土器が出土しており、遺構面上で発見されたほとんどの遺構は同じ時期のものと考えられる。

第3節 遺物

今回の調査地からは、28㍑容量のコンテナに、約3箱分の遺物が出土しているが、そのうち3分の1は遺構からの出土品で、残りは包含層など、遺構より上の堆積層から出土したものである。大半が土器で、1点だけ鉄鏃が出土している。

出土した土器はすべて小さな破片だったが、これらを整理して、観察し、図化できるものについては図化し、掲載した。その数はわずかなものだが、竪穴住居の床の上に散らばっていたものについては、この家が放棄された当時のものと考えられる。

竪穴住居出土の 土器

竪穴住居の床の上の土器は、5世紀後半のものから5世紀末まで、20ないし30年程度の時間の幅があることがわかったが、より時代の新しいものが住居の捨てられた時期を示していると考えられる。

住居は、廃屋になった後、風化して中に土が堆積したと考えられるが、床の上の土器も、廃屋になった後住居内に流れ込んできた土の中に混じっていた土器も、時期的にはほぼ同じである。

鉄鏃

住居からは、土器以外にも鉄鏃が1点出土しているが、これは廃屋になった後住居内に流れ込んできた土の中に混じっていたものである。

製塩土器

住居跡を埋めていた土、その他遺構の中に堆積していた土からは46個体以上の製塩土器が出土している。製塩炉などは今回発見できなかったが、古墳時代当時この近くで製塩が行なわれたと考えられる。

他の遺構から出土した土器も、時期的にはほぼ竪穴住居と同じ頃のものである。

第4節 結語

今回の調査では、古墳時代中期に棄てられた竪穴住居や、同じ時期の用途不明の遺構が多く発見された。今回の調査地は、上沢遺跡全体の中でも、西よりの範囲となる。

現在知られている範囲で上沢遺跡の地に人が住み始めたのは、縄文時代晩期ないしは弥生時代前期と考えられている。

これまでに行なわれた多くの調査によって、上沢遺跡のあちこちから弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代初頭などの住居やその他の遺構が数多く見つかっている。

今回の調査で見つかった古墳時代中期の時期、それに続く後期の遺構もわずかながら過去に報告例がある。より新しい時代のものとしては平安時代や中世の遺構も発見されているが、過去の調査結果を一覧したところ、現時点で最も報告例が多く、良好な遺構が多く発見されているのは古墳時代初頭および平安時代のものである。

これらのことから考えて、上沢遺跡は少なくとも縄文時代晩期には人が住み始め、弥生時代、古墳時代、平安時代から中世まで続いてきた集落である。弥生時代の中期と奈良時

代の遺構が発見されていないことから、この二つの時期にはあるいは人里はなれた土地と化していたのだろうか？なぜこの時期だけ人が住まなくなったのかはわからないが、今後この時期の遺構が発見される可能性もある。または、現時点では知られていない、どこか近くの土地に移り住んでいただけかもしれない。

上沢遺跡では、様々な時代の遺構が複雑に重なり合っている。古来から人の多く集まる、都市化の早い地域であったと考えられる。

今回の調査で発見された遺構の時期、古墳時代の上沢遺跡がどのような景観で、どのような人々が暮らしていたのかを知るには、まだ集められた資料は断片すぎて判断できない。ひとつひとつの調査結果を積み重ねて、集落全体の過去を復元する作業が私たちのもとに課題として残されている。時間のかかる作業であり、また発掘調査が現在進行形で進んでいることを考えてみても、容易には結論は出ないかもしれない。ひとつ疑問が解ければ新たな疑問が浮かんでくるのが現状であるが、近年の資料の増加には特に目覚しいものがあり、日々地域史に新たな事実が書き加えられている。

参考文献

- 『上沢遺跡 発掘調査報告書』1995 神戸市教育委員会編・発行
- 『平成8年度 神戸市埋蔵文化財年報』1999 神戸市教育委員会編・発行
- 『平成9年度 神戸市埋蔵文化財年報』2000 神戸市教育委員会編・発行
- 『祇園遺跡 第5次発掘調査報告書』2000 神戸市教育委員会編・発行
- 『神楽遺跡発掘調査報告書』1981 神戸市教育委員会編・発行
- 『日本考古学用語英訳辞典《橋本》』1988 山本 忠尚・松井 章編・奈良国立文化財研究所発行
- 『新修 神戸市史 歴史編I、自然・考古』1989 新修神戸市史編集委員会編・神戸市発行
- 『陶邑古窯址群I』(『平安学園研究報告 第10号』) 1966 田辺 昭三

KAMISAWA SITE,
A SETTLEMENT OF THE KOFUN PERIOD,
JAPAN

Report of the 35th Archaeological investigation

English Translation
The Kobe-city Board of education

2000

KAMISAWA SITE, A SETTLEMENT OF THE KOFUN PERIOD,
JAPAN

Report of the 35th archaeological investigation

SUMMARY

This book is the report of the 35th excavation surveys in Kamisawa Site which was carried out by the Kobe City Sports Association and the Kobe City Board of Education. This survey was undertaken by both organizations from February 1st to March 1st, 2000 prior to the Gobancho Park construction enterprise planned by the Kobe City Housing Bureau.

The survey was done only in the place that the site seemed to be destroyed by the park construction. By this construction work, the present ground was dug down to 8.2m depth above sea level. Therefore the survey was not done this time to the lower part than 8.2m, regardless of the existence or non-existence of the site. We can discover only one surface of occupation near 8.3m above sea level in this excavation range.

The features discovered on this surface are several pits, 14 earthen pits, 11 ditches and a pit dwelling. Judging from the excavated artifacts, these features belong to the Middle Kofun Period (5th century AD).

FEATURES

It is the pit dwelling which was confirmed in the southeastern part in the survey range that attracts attention most in discovered features. The form of the floor in this pit dwelling is a square form. Only as for the southernmost part in the house is destroyed to make a paddy field in recent years. It is obscure the plane form of the original house is a square or a length square. As far as it is possible to confirm at present, the area of the floor is equal to or more than 4.2m×4.2m. The hole of the pillar that was supporting a roof of the house was left on the floor surface. Besides, two holes of the use obscurity were confirmed.

When removing the soil in the pit dwelling, it confirmed that the fragments of the pottery and a lump of charcoal, a lump of burnt soil were scattered on the floor. We detected four pillar holes and 2 pits after doing the detailed investigation of the surface of the floor.

As a result, we suppose this floor was the floor where the inhabitant of this house walked around 1500 years ago.

However, because the fragment of the pottery was mixed in the inside of soil of the floor, it found that the floor was the one which was made by using the soil to have carried from the other place. The pottery which was excavated from the inside of soil of the floor and the pottery scattered on the floor surface were the same period. The soil of a floor was heaped up about 5cm thickness, the original ground appeared when removing this. It was not flat in the condition which was uneven.

From above mentioned survey result, the following fact was became clear. It thinks that this pit dwelling is to have built digging the ground of the floor at first, and then made it flat, after that digging the pillar hole and set up the pillar. Judging from the fragment of the pottery scattered on the floor, it thinks that this house was built sometime in the second half of the 5th century.

It became a deserted house before long and meanwhile, long much time does not seem to pass. The reason why we presumed thus is that the pottery scattered on the floor surface and excavated from the soil of the floor was the same period.

Besides, in the survey area this time we discovered many ditches and earthen pits of the use obscurity as well as the pit dwelling. Most of the features which were discovered on the surface are supposed to belong to the same time.

ARTIFACTS

The total amount of relics in this excavation is 3 boxes with 28 liter containers. Two thirds of them was excavated from the features and the remainder was excavated from the layer containing cultural remains. Most of them is the potteries except only one iron arrowhead. The excavated potteries were almost all the fragments, but which can be made a figure after arranging this in classification did a figure work and printed in this report. The potteries scattered on the floor might be left behind when this pit dwelling was abandoned. They includes the time difference of 20 or 30 years from the second half of the 5th century to the end of the 5th century. The newer one out of these potteries shows the abandoned time of the pit dwelling. One iron arrowhead discovered from the house was unearthed from the soil which flowed into the pit dwelling after being deserted house.

Also an equal to or more than 46 salt making potteries are unearthed in the house and other features. Although salt making hearth did not discovered, the fact that salt making pottery was unearthed indicates the possibility of salt making work near here.

CONCLUSIONS

In this excavation we discovered the renounced pit dwelling, ditches and large hole in the Middle Kofun Period. The investigation place this time is the west place in the whole site. In the range which understood at present, it thinks the people began to live in the site was the Final Jomon Period. After that people continued to live in from the Yayoi, the Kofun and the Heian Period to the Medieval Period. This place is the remote place from the village at the Middle Yayoi and the Nara Period because of nonexistence of the features in these Period. We don't know why people got not to live only in these times but the features may be discovered by the future survey. Or it may be to have transmigrated to the place near by which is not known yet.

The features in various periods are overlapping complicatedly in this site.

It thinks that this place was the early area of urbanization where many people gathered to live from ancient times. We can not know correctly about what people lived, in what view at Kamisawa Site in the Kofun Period, since there are few data gathered. It is to be needed the work that restores the whole village in the past by piling up the data one by one from now. It takes time. It is not easy to come to the conclusion, supposing that the survey is progressing. However, it is noteworthy the excavation data increases in number in recent years. The new fact is added to the local history every day.

報告書抄録

ふりがな	かみさわいせきはくつちょうさほうこくしょ
書名	だい35じちょうさ
副書名	上沢遺跡発掘調査報告書
巻次	－第35次調査－
シリーズ名	
シリーズ番号	
編者名	石島 三和
編者機関	神戸市教育委員会
所在地	兵庫県神戸市加納町6丁目5番1号
発行年	西暦2000年9月17日
所収遺跡名	
所在地	兵庫県神戸市兵庫区五番町三丁目
コード・市町村	28110
コード・遺跡番号	
北緯	34° 40'
東経	135° 07'
調査期間	2000.0201-0307
調査面積 (m ²)	390
調査原因	公園建設事業
所収遺跡名	上沢遺跡
種別	集落址
主な時代	古墳時代中期
主な遺構	堅穴住居1棟・溝11条・土坑14基・ピット21ヶ所
主な遺物	須恵器・製塙工具・鉄鏃
特記事項	

Kamisawa Site, a settlement of the Kofun Period, Japan
Report of the 35th Archaeological investigation
Edited by Ishijima, M.
Staff of the Kobe-City Board of Education Secretariat.

2000 by the Kobe-City Board of Education Secretariat.
printing in Japan by printing Co., ltd., Kobe

The Kobe-city board of education.
6-5-1 kanoutyo, Chuo-ku, Kobe, Japan
Phone : 078-322-5799

上沢遺跡発掘調査報告書 一第35次調査一

平成13年1月31日

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6丁目5番1号
電話 078-322-5799

印 刷 水山産業株式会社

広報印刷物登録・平成12年度第284号（A6類）

